

「命の大切さ」を実感させる教育プログラム策定委員会に係る
第2回「命の大切さ」を実感させる教育プログラム構想委員会
議事録（まとめ）

【協議の内容】

【「命の大切さ」を実感を持って学ぶ】

最近、子どもが被害者になったり、子どもが他の人を手にかけてりするようなことが次々と起こっている。命を大切にすることを子どもが実感を持って学んでいくことが大切な課題である。

子どもたちが自分の命を守り、周りの人の命も大切にすること、つまり人の命を粗末にすることがなく、社会の一員としてしっかりと生きていける人に育てることが教育の課題である。

自分なりの人生を充実させて生きていくことが「我的世界」を生きるということだ。そして命が土台となつてこそ「我的世界」を生きることができるのである。

「命の大切さ」は発達段階に応じて、頭の中だけの知識でなく、実感として深く深く心に刻み込まなければならないものである。

兵庫県はこの問題について震災以後、全国でも先進的な取組をしてきた。日本のどの学校でも抱えている大きな課題を兵庫県が解いていき、取組の成果を兵庫県のみならず、全国の子どもたちに還元していきたい。学校現場での地に足の着いた着実な実践になることを願って、提言の仕上げに取組んでいきたい。

【未来への視点】

ある学者が「人類はこのままいくとあと百年しかもたない」「命の危機」というようなことを言っている。「過去があつて今がある」ということを強調することが必要だ。

先日五人目の孫が生まれたが、未来に対してある程度役割を果たしたという思いを持った。ささやかなことだが、何代も何代も命がつながって、いわば鎖の輪のようにして未来ができていくということを実感した。

子どもたちが命の誕生に出会い、「未来が今できている瞬間」に立ち合っているのだなという気持ちになってくれればよいと思う。小さな命の誕生が自分の次の世代をつくり、未来をつくる。命のつながりが未来へ向かって展開していく。そういうことを実感する体験も必要なのではないか。

【障害を持つ人たち等への視点】

全体的に、障害や慢性的な神経難病を持って生きる障害者への視点が弱いのではないか。しんどさを持ちこたえながら生きている人たちが、ポジティブに生きていることをもっと強調した方がいいのではないか。

このプログラムモデルでは、いつも「老」と「死」が一緒に出てくる。子どもたちには高齢者や障害を持った人がこれだけ生きてきたのはすごいという視点を与えてやりたい。そして、これらの人たちの人生から、病気があっても、障害があっても生きている、「生きる」とはこういうことだと小学校低学年から取りあげるべきである。障害があっても、また、後わずかな命と思いながらも、命の意味を考えながら生きている人について考えさせるなどのいろんな「しかけ」が必要である

【死の受けとめ方】

理論編4の(1)イ「喜びと悲しみを組み合わせて準備する」の「死の存在の取り扱いについては小さいときは慎重に」という箇所について、それはその通りだが、「冷静」に受け止められる時期が果たしてあるのか。死を「冷静」に受け止められる時期など存在しないのではないか。

デス・エディケーションを受け止められない子どもは多く存在する。しかし、受け止められない子どもに対して、「受け止められる時期ではなかった」とか「未熟だった」と結論づけてしまうことは危険である。受け止められるようにどのようにサポートするのかという視点が必要である。

ことばの問題で言うと、「冷静」は使わない方がよい。歳をとっても、悟りを開いたお坊さんでも、死に直面すると死にたくないと言うが、当たり前のことである。「死を受けとめる力の付き具合を見極めながら指導していく」というような表現がふさわしい。完全に死を受けとめられる時期などない。準備のないままへたに体験させると、何時までも頭にこびりついてこだわり続けてしまう人がいる。

【高齢者とのふれあい体験】

高齢者とのふれあいは小学校低学年から経験させるのがいい。死の存在にこだわる時期というのがある。いわゆる「喪失感の先取り」であり、小学校低学年で強く出ることがある。核家族化が進み、今の子どもたちは高齢者とふれあう機会が少なくなっているので、小学校低学年から高齢者とのふれあい体験をさせるべきだ。

高齢者とのふれあいは幼稚園ぐらいからでも良い。小学校中学年になれば、核家族の中で身の回りに高齢者がいない生活になれてしまっているので、「近くにいない人のところへわざわざ行ってあげている」という感覚が出てくるのではないか。もう少し早い時期に、世の中には子どもだけでなく、お年寄りやいろんな人がいるということに気付かせる必要がある。

幼児期からの体験も大切であるし、各発達段階に応じたふれあいもあるのではないか。核家族で育った中学校2年生が、トライやる・ウィークの最初の3日間は高齢者と全くコミュニケーションがとれずに困ったが、4日目から楽しくふれあうことができるようになったという例もある。

【生命倫理の問題】

生命倫理の問題は高校でも取り扱っていると思うが、出生前診断などに関連して、誕生を選んでいくという考え方が出てきている。お母さんから自然に生まれるのが当たり前ではなくなる時代に来ている。

生命倫理をどう扱うかは中教審でも大きな問題になっている。学習指導要領には最低限これだけのことはやると定めてあり、その上に各学校で発展的にやることになっている。カトリックの基本的な考え方は、母体と子ども両方が危険なら、子どもの方を助け、次の世代を優先させるということである。ところが日本では、母体に影響があれば、それと逆のことをする。アメリカでは、中絶の考え方が最高裁判事の選任の判断になっている。どこまでやるかは別にして、少なくとも考えさせておく必要はある。

いわば親の都合でしか子どもを産まないの、生まれて来た子を育てる場合も、親の都合を優先させる。しかし命は元々自己目的的なものである。命を授かったら、いくら苦労してもとりあえず育てていくのべきであり、障害についての考え方も同じである。

日本の伝統文化を大切にしていきたいが、墮胎、嬰兒殺し、姥捨ては絶対に変えなければならない。これらの考え方は時代を超えて、繰り返し装いを変えながら出てくる。これ乗り越えていかなければならない。「檜山節考」などを読んで、話し合いをするなどして考えるべきである。

このような考え方が、安楽死や障害者排除の問題につながる。人の世話にならない人がよい人という考え方がある。人は誰でも死ぬとき誰かの世話になるが、それが当たり前の姿だ。

【子どもへの配慮】

表「生きる喜びの実体験」の、小学校中学年「人を愛する喜び」で「お母さん大好き！」はどうか。親のいない子や養護施設の子どもにとって、お母さんがテーマの話はつらい。伝統的な家族の在り方が変わってきている今、アプローチの際の配慮がいる。お母さんでなく、自分が信頼している大人ということでもよいのではないか。

そういう配慮が行き過ぎると、下手をすると家庭の問題を扱えないことになってしまうが、それではいけない。導入部分でいろんな家庭の形があること、いろんな暮らし方があること、自分で家庭を選べないことなどをしっかりと押えた上で指導する。

誕生についても、子どもができない人もいるということが話題になることがある。しかし、今ある誕生ということを勉強しないでよいのか。命がつながるためには誕生が必要だ。導入部分で、子どもが欲しい、欲しくないなどいろいろな考えがあることを確認し、その上で誕生についての学習をしていけばよいのではないか。

先生が子どもへ配慮することは全ての教育に必要な視点だ。また、事前の配慮や指導が子どもや家庭に伝わる工夫をしておくことが必要である。

様々な問題に対する配慮について父母や地域から指摘が出ることはある。事前に十分な

配慮事項をプログラムモデルに書き込んでおくことが大切だ。障害のある子についても同様である。

この提言のプログラムモデルでは、子どもの家庭状況の把握など事前事後の個別指導や配慮について考慮するようにしている。

【家庭との連携】

今回の提言は学校で実践していく上での理論であるから、学校の先生が自分の責任や役割を果たすという意味で、どのように実践していくかという視点が大事である。第一部は全てを網羅する意味での理論編ではないので、家庭のことは与件の問題である。家庭や親の問題はあるが、それを踏まえた上で、学校では教師として何ができるかということがポイントであり、それが強調される理論編であってほしい。

学校での学習内容が家庭にうまく伝わらなくて「学校で習ってるはずなのに、その態度は何？」などと子どもが怒られる材料にならないように、学校での教育を家庭にも充分理解してもらうことが必要である。

【教員研修】

犯罪被害者・遺族から学ぶ研修について

教員の研修プログラムの中で、犯罪被害者からの話は大事だと思う。しかし、教員や子どもたちがいろんなトラウマやしんどさを抱えていることもあるので、もっと一般的な死、例えばガンの末期患者の話や聞くなどよくある死からも学ぶべきだ。

一般的な病気や、ガン末期でありながら最期まで教壇に立ち続け、子どもたちに生きることを意味を伝えた神奈川県茅ヶ崎市浜之郷小学校の大瀬校長の話など、身近な人の話でもよいのではないかな。

病気など一般的な喪失体験も大切だ。一方、犯罪被害者家族の話は悲惨な状況の場合もあって聞く側が充分受けとめられるか問題ではあるが、殺人など昨今の状況を考えると、犯罪から命を守ることや、家族の苦しさなどにふれることは大切だと思う。

病気や苦しみを抱えている人は「支えてあげないといけない側」とあるという考え方は、「勝ち組」「負け組」といった考え方にもつながる。人を支えることで、自分が支えられる、それこそが共生の考え方である。役に立つことが嬉しいということと同時に、教えてもらって嬉しいといった考え方を持つことも大切である。

自己再発見の体験実習について

第一部実践編の教員研修「私の人生の振り返り」のアンハッピーな出来事の多かった人に対するアドバイスのところで、「自分を励ます」という表現をするのではなく、アンハッピーな状況を乗り越え、今まで頑張ってきたということの評価し、ほめてあげるのが大切である。

「私の人生の振り返り」で使用しているワークシートの例示に用いられている折れ線グラフについては、まず「人生万事塞翁が馬」という考え方を先生方にきちんと納得させる必要がある。

世間的な上がり下がりで考えるのではなく、意味づけの問題である。意味づけを多様に持って、事実を意味づけの中でプラスへ転化させるために、今何をやらないといけないかを考えること、その訓練が必要である。

「まあいいか」と思うこと、心理学でいうと ambiguity tolerance (多義性、あいまいさに耐える力、の意) であること、中途半端だけど持ちこたえていくことがあってもいい。意味づけはいっぱいあっていいのであって、一本化しなくてもいいということに気付いてもらえるといい。

まじめでもなく、不真面目でもなく、「非まじめ」であることが大切である。これが心の余裕を生むのである。子どもに対しても「まあいいか」という見方が必要である。世間的な意味での「幸せ」「不幸せ」で子どもをみてしまっはいけない。周りの大人や教師の価値判断が固定化すると、「まじめ」に子どもたちを評価してしまい、こうあらねばならないと子どもたちに押し付けてしまう。つまり「まあいいか」という見方をし、「非まじめ」に困難を乗り越えることが必要なのである。

現時点に中心を置いて、困難なことを乗り越えてきた今の自分を大事にするという考え方が大切である。「困難を乗り越えたから、今の自分があるんだ」という視点でアンハッピーだと感じていたことをとらえなおすべきだ。

教員のボランティア・福祉体験について

学校の先生が介護のボランティアや福祉体験をする必要があるのではないか。

ボランティアは言葉でいうのは簡単だが、実際にはその人の生き様が表れる。子どもたちに話しかける場合、口先だけではなく本当に思って語りかけていることが大切で、老人ホームの体験などで、生きるとはすごいことだ、すばらしいといった教師自身の発見や感動があれば同じ言葉でも違ってくる。

感性を養うには、居心地のいいところにはだめで、普段とは違うところに出かけて行って、普段出会わない人に会って初めて感じるができる。しかし、このような体験は強制でやってもだめであり、先生自身が自発的に取り組むことが必要である。そういう意味で、先生自身が問われていると言っても良い。

【授業用指導案】

この提言の中のプログラムモデルは、学習プログラムモデルというより、教育プログラムモデルという名称の方がよい。

指導案の形式に関して言うと、1時間扱いのものが多いが、1時間で無理なものは、いくつかの目標を組み合わせ、3～5時間の小単元を組む方がよい。

例えば高齢者や障害者、犯罪被害者などの話を聞く学習を考えると、1時間目は資料を用いた事前学習をし、2時間目にゲストティーチャーから話を聞き、3時間目にそれらを元に話し合いをすると、1単元で3時間から4時間の学習になる。すべてを1時間でやってしまうのは無理であろう。

指導案としては、目標構造図や分析図といったものも必要だろう。略案と細案の中間のような、もう少し詳しい形式がいい。